

ふるさと 再発見

広川町郷土史研究会

湯納楚で石炭が出た

前号はステゴドン象の話でしたが、今回は亜炭（炭化度の低いもの）についてです。

矢野一貞が『筑後将士軍談』 の中で示した見解

上妻郡広川庄内所々、土中より古木が出で俗に扶桑木と呼ぶ。その好きものは薪材と異ならない。当條村が最も多く、川の兩岸および水底は全く古木のみにして、土石無きものも有り。藤田村に出るものは可となすべし。広川より出るものは、彼の櫃の枝朶に非ず。村上量敏いわく、太古蒼海の時に波濤のために漂つて諸木集會し、自ら泥中に沈淪して土中に存ずるか。此の説を信ずべく、土中に埋れ数千歳を経て猶不滅せざるは、その含む塩気の故か。

予開物宰に任じ熟らこれを研究す。是は石炭の一種にして宇留と称するもので、決して木に非ざる也。近年上妻郡今村の山中より、地を掘りて枯木を取る。以つて薪かつ炭に代える。大は長七八間、圍二三丈なるものありと云々。

のように記して、この地域に亜炭（炭化度の低い褐炭の一種）層が存在することを指摘しています。これが後に豊岡炭坑・打越炭坑・湯納楚炭坑として開発されることとなるのです。

久留米藩の記録としては、『米府年表』の享保12年（1727年）10月3日の記述に「土中石炭焚間敷旨、久米新蔵申達候事之由」とあります。どうやら湯納楚の辺りで掘り出した石炭をかまどの燃料に使っていた証拠で、煙が多く出ることから侍の家では使用するな、というお達しが出たということでしょう。いま一つの記録は、『石原家記』の宝暦6年（1756年）3月の記述に「上津荒木村藤田に石炭山始候處、此所地下式丈餘下に大木朽木、上津荒木藤田より田方迄四里餘大分あり香氣あり、藤田百助殿東原段之丞殿為見分御出、沈香などの様なり」とあります。

話はずっと下って昭和の時代へ。戦時中は軍事需要が最優先でした。自

動車の燃料もガソリン不足により木炭や石炭（黒木辺りでは亜炭）などが代用品として利用され、バスの後部にはガス発生用のタンクが積まれていたのを記憶している人も少なくないはず。

さて、先に紹介した矢野一貞は、元治元年（1864年）に開物方御用掛に任命されています。この部署の役目は、鉾山や産物など藩益に叶いそうな物のすべてにわたり、開発振興奨励を担いました。そのような役目柄からか、石炭（良質な炭は出なかつたが）にも相應の関心をもっていったことができます。



黒木町（黒木炭鉾）産出の亜炭（黒木町公民館所蔵）

広川町古墳資料館だより

古墳資料館南庭には、一昨年「直弧文ワークショップ」（教育委員会主催）で制作された石人山古墳の横口式冢形石棺の復元物があります。高さ1.5メートル、幅1.5メートル、長さ2.7メートルで、熊本県産の阿蘇溶結凝灰岩が使われています。

熊本地震以後、材料である巨大な凝灰岩の産出は困難でしたが、幸運にも石棺を造る石材を入手することができました。棺蓋には、重圏文・直弧文の彫刻も再現され、触ったり、中に入ったりできる資料館の新しいシンボルになっています。



▲復元された横口式冢形石棺

よかよかだより

【紙面版】ボランティア出前講座

ボランティアのいま③ 子育て支援編

2021年8月号からシリーズで紹介している【紙面版】ボランティア出前講座。今回は、子どもの遊び場づくりを支援する「遊び場サポータークラブ」の井寺さん（代表）と永野さん（副代表）のお話から「子育て支援のいま」について考えます。

変化する子どもの遊び場

井寺 私が子どもの遊び場づくりに参加したきっかけは、広川町で子どもが安心して遊べる環境づくりを一緒に考えてくれないかと、町担当課から声をかけてもらったことです。子どもたちのくらしについて会議で議論する中で、塾や習い事で忙しい子どもや、ゲーム機・携帯端末で遊ぶ子どもの増加などが見えてきました。子育て世代の人から子どもが安心して遊べる場づくりを求める声もあり、改

めて地域社会で子育てする環境づくりの必要性を感じました。その後、公園「まち子のおにわ」が完成し、同時に子どもの遊び場づくりを支援する「遊び場サポータークラブ」が立ち上がりました。

遊びを通じた学びの場

井寺 遊び場サポータークラブでは、多世代交流・地域交流を目的に「まち子のおにわ」で「ハコボックス」というイベントを開催しています。遊びの時間は子どもにとつとでも大切です。子どもは遊びの体験から多くのことを学びます。ルールや約束を守ることから社会性・協調性を身につけ、学

から、人を想う力（人の気持ちを想像する力）を養っていくのだと考えます。私もそうですが、遊びを通じた幼少期の体験やつながりはいつまでも記憶に残り、かけがえないものになっています。

想いをつなぐ地域の居場所

永野 共働きの世帯が増えている中、思い通りに子どもとの時間をつけない家庭もあるかもしれません。さまざまな世代の人たちが関わることで、親子の休日を楽しく彩り、幼少期の思い出づくりを応援したいと思っています。ここで遊んだ子どもたちが将来自分の子どもと帰ってくる、遊びに来たいと思える居場所にしたいです。

井寺 遊び場づくりとは、単に場所や遊具整備を意味するのではなく、遊びやふれあいを通して、人と人をつないでいくことではないかと考えます。特に、他者との交流が制限されたコロナ禍で、その必要性を改めて実感しています。今後は「まち子のおにわ」を拠点に、町内の企業や事業所など、さまざまな主体と協働した「移動型遊び場」なども検討中です。世代を問わず気軽に立ち寄れる場所（人）を町内に増やしていきたいと思っています。

地域で子どもを育む

くらしの多様化が進むとともに、孤立した子育ての姿も見えてきました。誰にも頼ることができず、子育ての悩みを抱え込んでしまう家庭が増える中、いま、その子育てをさまざまな場面で応援する取り組みが増えています。その活動の柱は「地域で子どもを育むこと」。子どもの成長を地域で見守り応援する。その活動は子育てのしやすさにつながり、笑顔あふれる地域づくりそのものといえるのではないのでしょうか。



▲井寺さん（写真左）と永野さん（写真右）

HIROKAWA 里カフェ「まち子のおやつ」のinstagramで「ハコボックス」の情報を発信しています！



ボランティア活動センター
「よかよか」（はなやぎの里2階）
平日8時30分～17時15分
☎0943・32・7073
FAX 0943・32・7074